

特52

724

蘇州府志

卷之四 藝文志

蘇州府志



(筆記文体)

Handwritten text in cursive style, likely a preface or introduction.

(譯文)

此社は社丹歴國の有名なる支那の小説より翻澤せし新奇の佳談ふして頗る興あるのみか勸愚を博し子を得意の人情詰あり

社告
一本書の全拾三編を以て結局とす
一本書の一席の断を一編として刷行するが故に断の長短に據り紙数も亦増減する事あるべし
一本書の定價は壹編現金七錢五厘とす
一全拾三編の代價前金八拾七錢とす
一但東京府下は限り本社より直に配達し其他は一編に付郵便税二錢申受くべし
一本書を前金にて購求せらるゝ諸君へを前備の後本書を當社へ御廻送あらば更し序文を加へ無代價にて美麗な製本をべし
明治十七年十月八日版權免許
明治十七年十二月 出版
若林珮藏
東京下谷區下谷橋土町一丁目六十三番地
東京神田區向傳馬町三丁目十三番地
出版所 東京神田區向傳馬町三丁目十三番地

怪談牡丹燈籠第十三編

回ノ下

緒と取りまして稗といたし裏と表の目釘と書し養父相川新五兵衛から譲受けた藤四郎吉光の刀をさし主人飯島平左衛門より遺物に譲られた天正助定を差添といたしまして橋を渡りて板扉の横へ忍んでこいりますと三尺の開き戸が明いて居ますからハ、ア之が母が明けて置てくれたのだなと忍んで行きますと母の云ふ通り四疊半の小坐敷がありまますから雨戸の側へ立寄り耳を寄せて内の様子を窺ひますと家内の一体に腰靜まつたと見へ奉公人

三遊亭圓朝演述
若林珮藏筆記

の野の聲のみ寂といたしまして池上町と杉原町の境に橋があり
 まして其下を流れます氷の音のみいたして居ります孝助の最う
 家内が寝たかと耳を寄せて聞きますと内での小聲で念佛を唱へ
 て居る聲がいたしますからハテ誰か念佛を唱へて居るものか
 るそうだとお思ひながら雨戸へ手を掛けて細目に明けると母の
 おとゑが念珠を爪繰りまして念佛を唱へて居るから孝助の不審に
 思ひ小聲にあり孝母上さまこれのお母様のお寝間で御座います
 か万一場所を取違へましたか母ハ源次郎お國の妾が手引きを
 いたしまして疾に逃がしましたよと云ひれて孝助の嘆息し孝
 一、れ逃し遊ばしましたと母ハ十九年ぶりであれ前に逢ひ懐かし
 さの餘り源次郎お國の妾の家へ隠匿してあるから手引きをして私
 が討たせると云たの女の淺慮に前と道々來ながら前も手
 引きをして兩人を討たしてハ私が再縁した緇の口屋五兵衛殿に
 濟まあいと考へながら來ました今此の家的主人五郎三郎ハ十三

の時お國が十一の時から世話となりましたから實の子も同じ事
 お前の離縁として黒川の家へ置て來た縁のない孝助だから兩人
 を手引きをして逃がしましたそれの全く私がしたに違ひないから
 お前の仇の縁に繋がる妾を殺した國源次郎の跡を追掛けて勝手
 に仇を討ちあさいと云ひれ孝助の呆れて孝一、れ母様それハ
 何ゆゑ縁が切れたと仰います成程親ハ亂酒で御座いますから母
 母も愛想が尽きて私の四ツの時又置いて出なつた位ですか
 らよくの事だれ怨み申しませんが私ハ縁ハ切れても血統ハ
 切れぬ實の母上様私ハ物心が付まして母上様ハ達者か御無
 事でお出かた案じて計り居りました所此度圖らずに目も掛りま
 したのハ日頃信心をしたれ影だ殊も尊母が手引きをなすつ
 てね國源次郎を討たせて下さると仰つたから此上もあい難有事と
 喜んで居りましたそれを今晩に至つて前ハ縁がない越後屋に
 縁があるあかの他人に手引きをする縁がないと仰るハ情けない

左様なれ心なら江戸表に居る内になせこれと明かして下
 さいません私も仇の行衛を知らなければ知らないなりに又外々
 を捜し仮令草を分けてもれ國源次郎を討たせに置きませんそ
 れをお逃がし遊ばして仮令今から跡を追かけて往きましたも
 兩人の姿を變へて逃げますから私に討てませんから主人の家
 を立てる事出来ません縁の切れても血統の切れません縁が切
 れても血統が切れても宜しう御座います之餘りの事で御座いま
 すと怨みつ泣きつ口説き立て思ひ老母の膝の上上手をついて揺
 ぶりました母の倒れ若ものでモから母成程前屋敷奉公を
 しただけに理屈をいふ縁が切れても血統の切れないそれを私が
 手引きをして仇を討たなければ前主人飯島様の家を立てる
 事が出来なから其云譯の欺うしてすると膝の下よある懐剣を
 抜くより早く咽喉へガバリツと突き立てましたから孝助の瞋
 し慌て廻り付き孝お母様何故御自害なさいましたお母様ア

と力に任せて喚びます氣丈な母ですから懐剣を拭いて溢れ
 落る血を拭つてホツと吐く息も絶へになり面色土氣色
 に變じ息を絶つ計り母孝助縁の切れてもホツと血統の切
 れんといふ道理も迫り素より私に兩人を逃がせば死ぬ覺悟ホツ
 江戸で白翁堂と相て貰つた時お前の死相が出たから死ぬと
 云ひれたが實に人相の名人といふ先生の云れた事今思ひ當り
 ましたホツと再縁した家の娘がお前の主人を殺すと云ふの實
 になんたる悪縁かサア私に死んで往く身今息を留めれば此世に
 ない身体ホツと幽霊が云ふと思へば五郎三郎と義理のありま
 すまいに國源次郎の逃げて往た道だけを教へてやるから能く聞
 けよと云ひながら孝助の手を取膝に引き寄せる孝助の思はず
 も大聲を出して情ないといふ聲が聞へたから五郎三郎の何事か
 と来て障子を明けて見れば此始末五郎三郎の素より正直者だか
 ら母の側に廻り付き五母上様とそれだから私お申さない事で



實母の義
 死孝助の
 忠を全たの
 ぐらひ

のありません孝助様後で御挨拶を致します私のか國の兄で十三
 の時から御恩になり暖簾を分けて戴いたも母上様の庇蔭悪人の
 お國に義理を立て何故御自害なさいましたと云ふ聲が耳に通
 たか母の五郎三郎の顔をトつと見詰め苦しい息をつきあがら母
 五郎三郎ね前幼稚時から正當な人でれ前に似合ない彼のか
 國あれども義理に對しお位牌よ對し私が逃がしました又孝助に
 義理の立たんといふ血統のものが恩義を受けた主人の家が立
 たないといふ義理を思ひ自害をいたしたのりどうかお國源次郎
 の逃げ道を教へてやりたいグハツく必らず前怒んで呉れ
 でないよ五、エ、怨む所でのありません尊母ね煩悶から私グ申
 ませう孝助様ね聞きあさい宇都の宮の宿外れに慈光寺といふ寺
 がありまそから其寺を抜けて右へ往くと八幡山それから十郎ヶ
 峯から鹿沼へ出ますから貴君ね早くねいでなさいナアニ女の足
 ですから澤山へ往きまどまいから早くね國と源次郎の首を二ツ

取て母上様のれ目の見へる内に御覽に入れなさい早くくと
 云ふから孝助の泣きあがら孝、ハイ、母上様五郎三郎さんがね
 國と源次郎の逃げた道を教へて呉れましたから遠く逃げんうち
 に跡追かけ兩人の首級を討てた目に掛けますといふ聲漸く耳に
 通じ母、ホツ、勇ましい其辭どうか早く仇を討て御主人様のれ
 家を再興て立派な人に成て呉れホツ、五郎三郎殿此の孝助の
 外に兄弟もない身の上又五郎三郎殿も獨子種だからこれで仇の
 仇としてこれからのどうか實の兄弟と思ひ互ひに力になり合て
 私の手提を頼みますヨウ、と云ひながら孝助と五郎三郎の手
 を取て引き寄せますから兩人の泣く、介抱するうちに次第々
 に聲も細り苦き聲で母、ホツ、早く往かんか、と云て血のあ
 る懐劔を引き抜いてサア源次郎ね國の此の懐劔で止を刺せと云
 ひたいが最う云へない孝助の懐劔を受取り血を拭ひ仇を討て立
 歸り母上様に御覽に入れたいが此分でのこれがお顔の見納めだ

らうと心の中で念佛を唱へ孝五郎三郎さんどうか何分願ひます
 と出掛けて見えたが今母上が最後の際だから行き切れぬで又
 歸つて来ますと氣丈な母ですから血だらけで這出しあがらぬの
 息で母早く往かんかと云ふから孝助へい往きますと後よ
 心の残りますが仇を逃がして一大事と思ひ跡を追て往きまし
 た先刻から之れを立聞きして居た龜藏のソリヤこそと思ひ孝助
 より先さへ駆けぬけてトツと駈けて往きまして源さま私
 が今立陣をして居たら孝助の阿母が咽喉を突てお前さん方の道
 げた道を孝助に教へたからこゝへ追欠けて来るに違へぬへから
 れ前さん此の石橋の下へ抜刀の姿で隠れて居て孝助が石橋を
 一つ渡た所で私共が孝助に銃器を向けますからそうすると跡へ
 下がる所を後から突然に斬ておしまひなさい源ウん宜しい失錯
 ちやアいけないよと源次郎の石橋の下へ忍び抜刀を持って待ち構へ
 外の者へ十郎が峯の向ふの雑木山へ登つて銃砲を持って居る

所へ斯くぞ知らず孝助の息をもつかず追かけて来て石橋まで
 来て渡り掛ると龜待て孝助と云ふから孝助が見ると銃砲を持て
 居るやうだから孝火繩を持って何者だと思ふを見ますと喧嘩の龜
 藏が龜ヤイ孝助我と忘れたか牛込に居た龜藏だ能く我を酷い目
 にあせせたな手前が源様の跡を追かけて来たら殺さうと思つて
 待て居るのだ相イエ孝助手前のお蔭で屋敷と追出されて盗賊
 をとるやうに成た今此處で銃砲で打ち殺そんだからさう思へと
 云へばね國も銃砲と向てけ國孝助サア逆も逃げられぬへから打
 たれて死んでしまやアがれ孝助の後へ下て刀を引き抜きながら
 聲張り上げて孝卑怯だ源次郎下人や女を茲へ出して雑木山に隠れ
 て居るか手前も立派な武士トやアないか卑怯だといふ聲が深更
 だからヒーンと響きます源次郎の孝助の後ろから逃げたら討た
 うと思て居ますから孝助の進めバ銃砲で討たれる逃げバ源次郎
 が居て進退此に谷りて一生懸命に成たから額と總身から油汗が

出ます此時孝助が不圖胸に浮かんだの兼て良碩和尚も云はれ
 たが退くに利あらず進むに利あり仮令火の中水の中でも突切て
 往かなければ本望を遂る事出来なげし後へ下る時討た
 れると云ふの此の時なり仮令一發二發の彈丸に當つても何程
 の事あるべき踏込んで仇を討たせよ置くべきやと突然に切り込
 み卑怯だと云ひあがら喧嘩龜藏の腕を切り落しました龜藏の孝
 助が銃砲に恐れて後へ下がるやうに態と鼻の先へ出して居た所
 へ突然に切り込まれたのだからアツと云て後へ下つたが間に合
 じない手を切て落すと銃砲もドサリツと切落して仕舞ました昔
 時から随分腕の利た者の瓶を切り妙珍鉞の兇と割た例もありま
 すが孝助の夫れほど腕が利て居りませんが銃砲と切り落せる
 譯で彼の邊の芋莖畑が澤山あるから其芋莖へ火繩を巻き付けて
 それを持って追割が能く旅人を滅して金と取るといふ事を豫て龜
 藏が聞いて知てるからそいつを持って孝助を滅かした芋莖だから

れにでも切れます是れから圓朝にでも切れます龜藏がアツと云
 つて倒れたから相助の驚いて逃出す所と後ろから切掛るのを見
 てれ國の人の殺しと云ひあがら銃砲を投げ出して雜木山へ逃
 げ込んだが木の中だから帯が木の枝へ纏まつてよろける所を一
 刀あびせるとアツと云て倒れる源次郎此有様を見て己れれ國
 を斬た憎くい奴と孝助を斬らうとしたが雜木山で木が邪に成
 て斬れない所を孝助の後ろから來る奴があると思つて突然振返
 りながら源次郎の肋へ掛けて斬りましたが殺しませんでれ國と
 源次郎の髻を取て栗の根株へ突き付けました孝ヤイ悪人わりや
 ア恩義を忘却して昨年七月廿一日主人飯島平左衛門の留守を
 親ひ奥庭へ忍び込んでれ國と姦通して居る所へ此の孝助が參て
 手前と爭た所が手前主人の手紙を出しそれを證據だと云てよ
 くも孝助を弓の折れで打たなそれのみならず主人を殺害し兩人
 乗込んで飯島の家を自儘にしやうと云ふ人非人今こそ思ひ知た



孝助勇を
振ふて思
人の仇を
復そ

又炎土手登籠
第三十二
一

るかど云ひながら栗の根株へ兩人の面を擦り付けまそから兩人
 とも泣きながら免せエ勘忍してかくんなさいようといふのを耳
 にも掛けず孝「コレれ國手前母上様が義理を以て逃がして下す
 つたのハ極の口屋の位牌へ對して濟まん道まで教へて下すつ
 たなれども自害をなすつたも手前ゆゑだ唯一人の母親を能くも
 殺しをつたな主人の敵親の敵あふり殺しにするから左様心得ろ
 どこれから小刀を抜きまして孝「手前のやうな悪人に旦那様が欺
 されてお出さすつたかと思ふかど云ひあがら顔を縦横ズタ
 に切りまして又源次郎に向ひ孝「ヤ源次郎此口で悪口を云たか
 ど之れも同じくズタ「に切りまして又母の懐劍で留めを刺し
 て兩人の首級を斬り髪を持たが首級といふものハ重いもので孝
 助ハ敵を討てもうこれよいと思ふと心に緩みが出で尻もちを
 ついて孝「ア、難有日頃信心する八幡築土明神の庇をもちまし
 て首尾能く敵を討ちかうせましたと拜みをしてコレ往ふと立上

ると人殺しくと云ふ聲がするから振り向くと龜藏と相助の兩人
 が眼が眩んでるから知らずに孝助の方へ逃げて来るから此奴も
 敵の片別れと兩人とも斬り殺して二ツの首級を下げてヒヨロ
 と宇都の宮へ歸つて来ますと往來の者ハ驚きました生首級と二
 ツ持つて通るのだから驚きまそ中に殿様へ訴へる者もありまし
 た孝助ハ直ぐに五郎三郎の所へ往て敵を討た次第を述べ殊に母
 がまだ目が見へますかど云ひれ五郎三郎ハ妹の首級を見て胸塞
 がり物も云へあい母上様の先程息が切れましましたと云ふから此
 儘でハ置けあいと云ふので御領主様へ届けると復讐の事だから
 と云ふので孝助ハ人を付けて江戸表へ送り届ける孝助ハ相川の
 所へ歸り首尾能く敵を討た顛末を述べ夫れより頼小林へ届け
 る小林から其筋へ申立て孝助が主人の敵を討た廉を以て飯島平
 左衛門の遺言に任せ孝助の一子孝太郎を以て飯島の家と再興ま
 して孝助ハ後見となり芽出度本領安堵いたしますと其翌日伴藏



白十編魚風宮歌行
一巻

がれ所刑になり其捨札を讀んで見ますと思議な事で飯島のれ
 嬢さまと萩原新三郎と交た所から伴藏の悪事を働いたといふ事
 が解りましたから孝助の主人の爲め娘の爲め萩原新三郎の爲に
 濡れ佛と建立いたしましたといふ是れ新幡隨院濡れ佛の縁起で此物
 語も多少の勸善懲惡の道を助る事もやと斯く長々と高聴にいれ
 ました

怪談牡丹燈籠第十三編大尾

